



Title	脳卒中の地域差と過去の食生活
Author(s)	小澤, 秀樹
Citation	大阪大学, 1969, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29965
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	小澤秀樹
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 1751 号
学位授与の日付	昭和44年5月1日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	脳卒中の地域差と過去の食生活
論文審査委員	(主査) 教授 関悌四郎 (副査) 教授 丸山博 教授 阿部裕

論文内容の要旨

〔目的〕

わが国の脳卒中死亡率は地域的に著しい差異がある。都道府県別の訂正死亡率でみると秋田県を最高として東北地方に高く近畿以西は概して低い。著者らは脳卒中の成因を検討するため、先に脳卒中を脳出血と脳軟化に分けて秋田と大阪の死亡率、発生率を比較したが、秋田の死亡率は大阪のそれに比し脳出血、脳軟化とともに著しく高率であり、発生率についても同様であった。このように地域的差異を生ずる脳卒中の要因として、従来より食生活があげられ、特に米の多食と食塩の摂取過剰が注目されている。脳卒中発生には、その背景にある高血圧や動脈硬化の経過を考えると、食生活の検討は現時点の栄養調査だけでは不十分であり、また近年の変化が著しいことも考えあわせて、過去から現在にわたる食生活の推移を観察することが必要である。著者は、過去の食生活の調査に際し、食生活に関する資料を特に昔の記録に残されたものを中心収集し、さらに地域住民に直接接して現在に残されている食習慣をとらえ、人々が実際に生活していた姿に近づくことによって脳卒中と食生活の関連を考察した。

〔方法〕

秋田と大阪(主として農山村部)を対比して、過去から現在に至る食生活の変遷を論ずるのであるが、過去の時点としては食生活の安定していた時期として、昭和10年頃をとった。この当時の食生活を示す資料は、農家経済調査、農山漁村経済事情調査、農村生活改善資料調査の4種の調査記録、および当時の秋田農村の食生活をそのまま記録した食膳費調査、食膳献立という村誌編さんための記録である。これに加えて、当時の食生活についてのアンケートも参考とした。現在の食生活については、昭和30年より10年間の国民栄養調査成績より、秋田、大阪の農村地区をとり出し、さらに食塩摂取量を知るために、著者は栄養調査に調味料の調査を加え、秋田、大

阪で行なった。これらの資料および調査成績より、米、食塩、動物性食品について、秋田と大阪における1人1日当たりの消費量を、昭和10年頃と現在の時点で比較した。さらに秋田における食塩の使用の特徴を示すものとして、味噌の長期保存、魚や野菜・山菜の塩蔵に関して現在に残されている習慣や食器等により検討を加えた。

〔成 績〕

- (1) 米の摂取量は、昭和10年頃において秋田は大阪に比し多量であり、農業男子1人1日当たり6合余りを示し大阪に比べ1合の差がある。しかしながら現在の秋田においては米の摂取量は漸次減少して大阪との差は少なくなり、秋田における米の大食の特徴は著明でなくなってきたている。
- (2) 食塩の消費量は、昭和10年頃においては1人1日当たり秋田34g、大阪24gを示した。この中には漬物や食品塩蔵に用いられて一部摂取されなかった分を含むとしても、秋田の食塩消費量は多量である。秋田における食塩摂取の特徴は味噌の多量摂取と食品塩蔵の習慣に示される。現在の食塩摂取量は秋田23g、大阪14gであり、秋田では現在においても摂取量は大きい。(秋田では味噌は3度の食事に欠かせないものであって3年分を貯えることが当然とされ、また、冬期に食べる副食物の確保のため、盛期にとれた魚や山菜・野菜が塩蔵されていた。今日、食品流通の改善、野菜類の品種改良等により食品の入手が容易になってもこれらの習慣が続けられている。)
- (3) 動物性食品の摂取量は、昭和10年、現在ともに秋田は大阪より少ない。この摂取量は現在でも十分とは考えないが、過去においてはさらに少なく、現在の摂取量の2分の1あるいは3分の1程度の摂取量であったと考えられる。

近年の食生活の変化により主食が減り、副食物が種類も量も豊富になってきたが、農村における動物性食品の摂取量はなお少ない。協同研究者富永は、秋田の一般住民ならびに脳卒中患者の血清脂質値が大阪のそれに比し低いことを報告したが、著者の調査結果からも、脂質の過剰摂取による脂質代謝異常が脳卒中の主因をなしているとは考え難い。秋田農村の食生活では、魚、野菜、山菜の塩蔵、3年分の味噌の確保などに示される食塩多量摂取が過去から現在にわたり、習慣、嗜好となって続いている。そして、これは経済機構の近年の変化の中にも容易に改められていない。

〔総 括〕

脳卒中死亡率の高い秋田では、かつて米の大食の傾向が認められたが現在ではその特徴は失なわれてきている。一方、食塩は過去から現在にわたって多量に摂取されており、長年培われた味噌の多量摂取や食品の塩蔵の習慣として根強く残っていることを明らかにした。

論 文 の 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は、従来主観的な判断にたより勝ちであった過去の栄養調査を、生活習慣あるいは埋蔵された資料に基づいて正確に判断するための新しい調査方法を開発して実施した点に意義がある。

また、このようにして得られた栄養調査結果を、町村単位に丹念に調査した脳卒中死亡率、および発生率と比較検討し、秋田の脳卒中は、過去より現在にわたる食品の塩蔵の習慣に結びついていることを明らかにした。